

【報告】

IAML 日本支部第 54 回研究例会・2013 年度総会

第 54 回研究例会

2013 年 6 月 2 日

南葵音楽文庫貴重資料デジタル化 ー 現状と公開に向けて ー

美山 良夫

1 ワイマールの図書館火災

図書館から吹き出した炎が、ワイマールの空を焦がしたのは、2004 年 9 月 2 日の夜であった。1691 年に建設された館を、ロココ様式の内装、夥しい美術工芸品を配した図書館としたのは、自らも作曲をしたというアンナ・アマーリア公妃（1739 - 1807）。夫君ザクセン＝ワイマール＝アイゼナハ公エルンスト・アウグスト 2 世の早世後、摂政として国の舵取りをしながらも、彼女は、ゲーテの『ファウスト』関連貴重資料等を含む珠玉の蒐集をつづけた。彼女の名前を冠した図書館の蔵書は、最終的には 100 万冊に及んだ。

火災に際して、1534 年のルター聖書などは搬出され被害を免れたものの、約 5 万点の蔵書が灰燼に帰し、およそ 6 万点の書籍は修復不可能なほどのダメージを受けたという。このなかに、アンナ・アマーリア公妃の音楽資料も含まれていた。火災対策を施した新設書庫に

蔵書に移す 5 週間前におきた悲劇であった。

その後の調査によれば、1 万点を越える資料は、人類の財産から永遠に失われる結果になったという。それ自体が世界文化遺産でもある美しい図書館、貴重な蔵書が収蔵されていた模様は、パノラマ映像にも収められており、今も往時を偲ぶことができる。傷んだ蔵書の補修は、今も続いているという。

<http://3d-top-event.info/?culture=20>

2 慶應義塾大学 DMC 機構によるデジタル化

その 2ヶ月前、筆者は縁あって南葵音楽文庫が収蔵されている場所を見学する機会を得た。同年、慶應義塾大学は文部科学省科学技術振興調整費の「戦略的研究拠点育成プログラム」に採択され、デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC 機構）を設立したばかりであり、筆者はそのプロジェクトのひとつに参画していた。ワイマールの出来事を思い、「コンテンツ資源化・流通」部門に、南葵を念頭にした＜音楽資料のデジタル化＞プロジェクトを追加提案することに躊躇はなかった。（財）読売日本交響楽団と貴重資料の撮影ならびにマイクロフィルムのデジタル化に関する確認書を取りかわしたうえで、2006 年夏よりデジタル化をすすめ、関連した調査や南葵資料をもとにしたコ

ンサートや録音を併せおこなった。

このような活動が可能になったのは、貴重資料の高精細撮影に習熟したカメラチーム、デジタルスタジオ、音楽プロデューサー、録音エンジニア、アーカイヴ資料専門家らを機構自体が擁していたためであった。活動の詳細は、「Oxalis 音楽資料デジタル・アーカイヴング研究」第 1～3 号（2008～10）に記載したほか、日本音楽学会例会（2007 年 12 月 8 日）、IAML 日本支部と共催した報告会で紹介に努めてきた。これらに要したすべてのコストは、独立行政法人科学技術振興機構（J S T）経由による文部科学省からの資金のほか、公的助成金や篤志家個人の寄附により賄われた。また事業が可能になったのは、所有者読響の理解と協力、音楽研究家、演奏家たちのほか、何人もの IAML 会員による協力・支援の賜物にほかならない。

しかし、これらの事業や関連調査を通じて、南葵音楽文庫の維持や活用にかかわる問題点も明らかになった。まず、貴重資料のなかには、経年からくる装幀や造本の傷みが激しく、資料を完全に開いては撮影できない状態のものが少なからず含まれていた。撮影用のクレイドル調達を検討したが、それが実現しても撮影に要する時間増とスタッフの配備という難問に直面した。

つぎにマイクロフィルムの損傷である。マイクロリーダーに由来する傷もあるが、何よりフィルムから発する強い酸化臭、いわゆるビネガー・シンドロームは、作成当時のセルロースアセテートによるフィルムの限界を告げていた。これは、直ちにフォーマットを決め、全てを短期間でデジタル化（外注）して破壊から免れることができた。

さらに、将来的にどのように南葵音楽文庫を維持し、活用するのかのビジョン作り



美山良夫氏

りが問題であった。所有者側ではないとはいえ、将来の活用をふまえたメタデータの作成など、関係する課題は多岐にわたる。新聞社という大きな組織の中に、順次理解者をふやすことができつつあるのは、読響側の尽力によるところ大である。また DMC 機構のプロジェクトとしても、デジタル・コンテクストをふまえた資源化と流通という研究課題のもと、活用のコンセプトを検討し、逐次発表した。

デジタル化と並行して文庫の来歴や、設立当初の活動に関する調査を分担してすすめた。従来、文庫の中核をなすカミングズ・コレクションはロンドンのオークション（1917 年）において入手とされていたが、実態はカミングズ遺族からの購入であり、そのためオークションに出品されなかった資料も南葵にもたらされた事実が、オークション目録等の検討により明らかになった。この詳細については、後日に譲りたい。

慶應義塾大学 DMC 機構におけるデジタル化のうち、マイクロフィルムから二値でデジタル化した印刷資料については、同機構（現在は DMC 研究センターと改称）のサイトから画像を公開、利用に供している。一方、グレースケールによってデジタル化した画像については、データのボリュームばかりでなく、資料の内

容検証、メタデータ記述など多くの解決すべき問題が依然残されている。

他方、デジタル化がひろく地平に関しては、同機構において並行したプロジェクトとの協働や刺激により、当初のプロジェクト・カテゴリーにある「資源化と流通」を発展させ、学術研究と民間における活用、ならびに教育展開を複合、デジタル音楽資源の共有化をめざした「音楽資源統合リポジトリ」の理路提案にまですすめることができた。

なおDMC機構は2009年度に文部科学省の評価を受けた後、翌年からはデジタルメディア・コンテンツ統合研究センターとして再出発したが、南葵音楽文庫の資料画像公開は、「デジタル南葵楽堂」サイトで引き継がれている。
<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/>

3 芸術資源マネジメント研究所によるデジタル化

読売日本交響楽団は、公益財団法人化にともない、公益事業として演奏事業とともに南葵音楽文庫事業を定款に明記、2012年6月の理事会、評議員会をもって、法人として南葵に取り組む決定をおこなった。他方、一般社団法人芸術資源マネジメント研究所（2012年4月設立）は、事業のひとつに芸術文化資源の維持・評価・活用を掲げている。その一環として、読響から南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化（3年計画）ならびに価値評価（単年度）を受託、慶應DMC機構では完結できなかった部分について事業を引き継ぐことになった。なお、価値評価とは、公益法人に帰属する財産について、時価で評価する必要が生じたための業務である。

デジタル化事業の承継に関しては、かつてDMC機構が有していた資源（機材、人材）は利用できないうえ、コストとスピードの面で効率化も必要であった。保管場所に仮設のスタジオ

を設け、貴重資料の扱いに通じたカメラチームを配置する方法にかわって、高精度で収録可能なスキャナーを導入し、複数台を同時に稼働させて作業日数の短縮をはかった。

貴重資料保全の観点から、通常みられるフラットベッド型のスキャナーは採用せず、現在、ブックスキャナーと非接触型ラインスキャナーを各2台設置し、資料の状態に応じて使い分けている。ブックスキャナー（台湾製）は、本を90度までひらけば収録可能で、綴じに負担を掛けずに収録可能であり、頁数が多く、開きにくい本に有効である。また非接触型ラインスキャナー（ドイツ製）は、見開きでも1ページごとにも収録可能で、スキャナー自体に左右独自に電動で高さ調節が可能なクレイドルのほか、収録面の平面性を保つためのガラスを組み込むなど、貴重資料の画像収録のため開発設計された機材である。そのため資料への負荷を減らすとともに効率的な収録が可能となった。国立国会図書館のデジタル化に際して採用されているスキャナーと同型機である。

スキャナーの採用によって、機材に習熟したカメラチームに代わり、大学院生でも作業が可能になった。貴重資料の扱い方に関する指導は必要であるが、資料に対す respect があれば、通常はさして問題はない。ただし、扱う資料には、旧所有者が挟み込んだ紙片、各種の書き込み、訂正、ページのなかの破れや穴（そのままスキャンすると下にあるページの文字や楽譜が収録される）など、個体独自の情報や問題がある場合が少なからずある。それらの情報、状態が、後世に的確に伝わるような判断が、収録にあたり常に求められている。

この種の問題解決、また資料の紙質や紙色からくる色温度の微調整など作業準備等に必要な時間の割合は、資料により異なるとはいえ、スキャンが作動している実時間に対してかなり

大きい。さらに、画像収録以後の、確認、メタデータ付与などに要する時間も相当必要になる。資料によっては、内容の再調査や表記について再検討が必要であり、それは時間の測りようがない場合もある。経験則にすぎず、調査を含む作業の多寡や精度にも左右されるが、実際に収録作業をおこなう日数に対し、最終的にデジタルデータとして完成するのに必要な日数は数倍から 10 倍程必要である。

高精細デジタル画像を新たに収録している範囲は、約 2 万点にのぼる資料数に対して、ごく僅かな割合にすぎない。具体的には、「蔵書目録（貴重資料）」（1970 年発行）の 1～12 ページに掲載された写本音楽資料である。対象の総ページ数は約 10000 ページ。本年 9 月末までに画像収録が終了しているのは約 8000 ページ（未整理含む）である。

4 今後に向けて

「新ベートーヴェン全集」のために自筆譜の高精細デジタル画像を、ボンのベートーヴェン・アルヒーフに提供するなど、読響は個々の事案を検討・吟味して画像提供をおこなってきた。また価値評価の委員会では、今後の活用についての意見聴取もおこなわれた。今後、読響は自らのサイトにおいて、慶應のサイトともリンクしつつ南葵音楽文庫の紹介をおこなう予定で、その基礎データ作成は芸術資源マネジメント研究所がおこなっている。また、読響新聞新社屋（大手町）内に設けられるコンサート・ホール（客席数約 500）では、資料の展示をおこなう計画という。

筆者が南葵保管場所を訪ね、ワイマールの悲報に接した夏から 9 年目。閉ざされていたコレクションは、徐々にだが、確実に開かれつつある。

〔本稿は研究例会後に起稿したもので、一部内容が異なります。〕

（みやま よしお 慶應義塾大学名誉教授）

第 54 回研究例会傍聴記

栗林 あかね

昨年 9 月にリニューアルオープンした、東京芸術劇場内ミーティングルームが会場であった。例会前には 2012 年度 IAML 日本支部総会が行われ、2012 年度の活動及び会計報告と、2013 年度の活動計画・予算についての審議結果、可決された。休憩をはさみ、前半の活気そのままに研究例会が行われた。日ごろ音楽資料を扱う現場において、自身の不勉強と先行きの不安を痛感しながら資料と向き合い、時には絶望さえ脳内をよぎっていた。本講演を拝聴できたことは、これから先の仕事、人生にとって進むべき方向性と、希望の光を与えられたようであった、と個人的に思っている。以下、報告の要約と筆者の所感を織り交ぜながら述べていくが、発表内容に関しての理解不足、見解相違の点については、ご指摘いただければ幸いである。

1. 美山良夫氏「南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化—現状と公開に向けて」

■デジタル化作業と現在

2005 年から本格始動した、慶應義塾大学 DMC 機構によるデジタルメディアコンテンツモデル事業「南葵音楽文庫貴重資料デジタル化」の作業は、2009 年からは同 Web サイト上での「南葵音楽文庫」所蔵貴重資料デジタル画像のテスト公開も開始し、今まさに佳境を迎えている。美山氏は、IAML 日本支部例会はもちろんその他さまざまな場において、南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化作業についての紹介を行っているが、これまでに報告されてきた「音楽資料のデジタルコンテ

ンツ化」「メタデータおよびその階層構造の試作」「契約モデルの作成 (コレクション所有者)」「DMC スタジオを活用したコンテンツ制作」など引き続きの作業と共に、今後は更に「資料の評価 (時価評価)」「サイト上での公開」へも積極的に向かうよう動いていくことも、今回の報告全体を通して話された。

南葵音楽文庫貴重資料デジタル化事業発足のきっかけは、2004年夏に読売日本交響楽団で保管管理されていた南葵音楽文庫を美山氏が見学に訪れたことであった。当日は、美山氏より同資料のうちのF. ワインガルトナー作曲「Japanische Lieder Op.45 (日本の歌)」という非常に珍しい楽譜が、音源と共にスクリーン上で紹介された。これは、レクラム文庫のドイツ語訳された日本の詩を見たF. ワインガルトナー (1863-1942) が作曲、特別版として作成した楽譜であり、作曲者が来日した際に、南葵音楽文庫より前に設立されていた「南葵文庫」にサイン入りで寄付された。この楽譜の見開き、左側の右下には「演奏権付き楽譜」とドイツ語で書かれているが、南葵音楽文庫の中には、ほかにもいくつかのこのような演奏権付き楽譜というものがあるという。この「演奏権付き楽譜」の所有者は、著作権料を払わずとも演奏ができるということである。近年は、デジタル化などの作業と共に、読売日本交響楽団と協力し、これらの楽譜を活用した録音セッションやコンサートを行うことにも力を入れてきた。南葵音楽文庫にはどのような資料があるのかということ、専門家や研究者、関係者など一部の人々には知られていても、それらがどのような音楽であるかを知る機会はなかなか少ないと感じていた美山氏は、内外さまざまなところへ積極的に動き、協力や支援を得て、生きた音楽を提供することに情熱を傾けて実現させてきた。その一端が、冒頭における音源

紹介である。

■これまでの資料公開の歩み

南葵音楽文庫が日本に到着し、一般公開されたのは1920年だが、1923年の関東大震災により収納していた南葵楽堂が被害を受け、公開を中止した。翌年には南葵音楽図書館として再び公開されたが、諸般の事情により再び公開は中止してしまう。その後の資料公開の再開は、1967年上野松坂屋・大阪天満橋松坂屋において読売新聞社と日本音楽学会の共催で行われた、南葵音楽文庫特別公開展の開催においてである。この展示会を契機とし、また関係者の尽力によって、同年、日本近代文学館内において南葵音楽文庫の調査・分類・整理がはじめられた。この頃に、美山氏は初めて南葵音楽文庫を訪れたという。近代文学館での安息期約10年の後、またしても諸般の事情によって資料の公開は中止され、2005年に本プロジェクトが始動するまで、一般への公開は行われなかった。

ここで、南葵音楽文庫の経緯について改めて触れる。紀州徳川家第16代当主徳頼貞氏が1917年にロンドン・サザビーズで行われたオークションに参加し、資料を手に入れたという記述されている場合があるがそれは正しくなく、実際には徳川氏はオークションに間に合わなかったということである。では徳川氏はどのようにして資料を手に入れたのかというと、オークション終了後に、徳川氏のイギリス・ケンブリッジにおける恩師を介してカミングズ家に交渉し、オークションで出なかった (落札されなかった) ものをまとめて購入することを打診したというのが本当のようで、その購入金額は13300円 (当時) であった。

■南葵音楽文庫のこれから

南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化による、資料利用者の増加を期待することはもちろんであるが、それと同時に、デジタルではわかりにくい、実物の音楽資料の持つ説得力・重みも広く伝えていきたいと考えている。本の装丁や紙の質感など、視覚から得られる時代や歴史は、実物が目の前にあることで初めて伝えられると語られた美山氏の目下の目標は、読売新聞社の誇る 2 大事業、すなわち読売ジャイアンツと箱根駅伝に並ぶ第 3 番目として、南葵音楽文庫が位置づけられることだという。現在、南葵音楽文庫所有者の読売日本交響楽団の母体である読売新聞社では、千代田区大手町の東京本社ビルの建て替えプロジェクトが行われている。その本社ビルには 2 つのホールが設置される予定であり、ホールホワイエにおいて、南葵音楽文庫貴重資料の展示スペースを確保できないかと思案している最中であるとは、実現すれば大変嬉しいことである。音楽資料への出会いを身近に置き、関心への間口を広げることは、やがてプロジェクトの理解へつながっていくだろう。

作業開始から最初 3~4 年間、少しずつ内部の同調者を増やしていった。読売新聞に当該記事が出て、周知の事実となったことで、組織全体への理解も広がり現在に至るわけだが、作業の円滑な進行のためには、内部の協力なくして成し得なく、少しずつでも同調者を増やしていくこと、地道に訴えかけ続けることは間違いなく重要である。この言葉から、どんな場合においても、物事を繋ぐのは人と人であり、互いが理解しようとする姿勢と行動を伴うことが最も強勢であることを示されたと強く感じずにはいられない。南葵音楽文庫貴重資料デジタル化の完成と展示の実現に向けての活動には、今後も大注目であり、道

筋を開かれたその後に続けるよう努めていきたい。

2. 伊藤真理氏、加藤信哉氏、松下鈞氏「IAML 日本支部 30 周年記念事業『現職音楽ライブラリアン研修経験に関する調査』報告と討議」

■伊藤真理氏、加藤信哉氏「現職音楽ライブラリアンの研修経験に関する実態調査」報告
本研究は、音楽図書館協議会加盟館の現職者を対象とし、音楽ライブラリアンの研修受講調査にあたった結果報告であるが、現職の専任職員の回答数が想定よりも少なく、その集計にも影響があったという。現在、国公立図書館や大学図書館、またその他の図書館同種施設の多くでは、非正規職員での業務対応が行われており、このことは図書館業界全体を取り巻く大きな問題の一つとして図書館界のみならず雇用問題その他多くの場で取



伊藤真理氏

り上げられている。日本図書館協会『日本の図書館 統計と名簿』から、2012 年度を例に数字をみると、公共図書館における専任職員数（兼職含む）は 11652（うち司書・司書補 6053）、非常勤職員数は約 15823（うち司書・司書補約 8656）、派遣・委託職員

数は約 8671（うち司書・司書補 4801）で、非常勤と派遣・委託を合わせた雇用者数は正規職員数のおよそ 2 倍、大学図書館においては、専任職員数は（兼職含）5215、非常勤または派遣等職員数は 7964 で、非正規労働者数は正職員のおよそ 1.5 倍である。音楽大学図書館も例外ではなく、音楽図書館協議会や IAML 参加館・職員からも、正規職員数の減少が及ぼす後進の音楽ライブラリアン育成への影響に関する危惧の念が抱かれている。言わずもがな、音楽資料の整備には専門的な知識を持つ人材が不可欠であり、特に目録作成業務においては個人の能力に依存されてしまう。音楽図書館に専任職員を配置することは非常に困難なことだが、それぞれ置かれている現状を踏まえながらも、やはり専門性を持った人材を安定して確保していくことは必須であり、雇用形態に左右されない、音楽ライブラリアンに備えるべき知識やスキルを磨く研修制度が求められている。今後も調査方法を精査しながら、音楽ライブラリアンの研修実態を明らかにし、そしてそれらのデータを生かした、組織的な音楽ライブラリアン養成のあり方について検討を行う予定であるということで、報告は終了した。

■松下鈞氏「NDL『音楽資料・情報担当者セミナー』」報告

図書館資料と、それを取り巻く環境が目まぐるしく変化している昨今において、音楽資料に至ってもその例外ではなく、時代に求められるカタチで利用者へ供されなければならない。とりわけ資料のデジタル化における需要が急速に高まっている現在においては、各機関レベルはもちろん図書館業界全体での協力体制を整えていくことが今後ますます求められていくと考えられる。それと同時に、



加藤信哉氏

それぞれの資料の特性をよく把握した各種ライブラリアンの育成は、業界全体における今後の重要な課題の一つである。

松下氏が代表を務める一般社団法人次世代コンテンツ推進機構が行なった、平成 22～24 年の過去 3 年間における国立国会図書館での「音楽資料・情報担当者セミナー」についての活動紹介と報告がされた。

松下氏が考える最重要課題の一つに、音楽ライブラリアンの育成、立場の確立がある。セミナー毎に、普段の業務の中で音楽資料を扱う図書館員またはそれに準ずる者へのアンケートを行い、その結果から、現職員たちが音楽資料を扱う際に必要とするテーマや課題が明確となった。現職員たちの関心の特に高いテーマは、次の通りであった。

テーマ	H22	H23
音楽資料の種類・特性	55	70
音楽資料の目録法に関する知識と技術	35	70
音楽図書館の基礎知識	45	65
レファレンス情報源に関する知識と技術	50	55
デジタル化アーカイヴ構築に関する知識と技術	45	60

（当日配布資料より抜粋）

現場で必要としている知識の提供に素早



松下 鈞氏

く対応することで、結果的に、次世代の音楽ライブラリアンの育成につながる。現職にいま役立つこと・必要なことを提供できるよう、アンケート結果を精査し、今後の研修へ反映されることだろう。なお、次世代音楽ライブラリアンの育成に関し、MLAJにも協力を打診している最中だが、まだ返事はないとのことである

この3年間を通し、セミナー参加者の多くは非専任職員であったという事実がわかったが、この視点からでは、組織に根付く音楽ライブラリアンの育成の必要性を、彼らが属する組織上層部の危機感を強く感じているとは言い難い。音楽ライブラリアンは専門性の高い仕事であり、長年の経験を持った現職ライブラリアンのスキルを後世へ伝えていかない手はないのだが、そのためには第三者へ訴えるための、目に見える根拠が必要になる。熟練から次世代へ、現場でそのスキルを伝えていくことは理想であるが、しかし、先にも述べた雇用状態の不安定さや現代の就労事情により、そのような例は限られている。そこで、次世代コンテンツ機構では、音楽資料を扱うすべてのライブラリアンたちに対し基礎知識の共有を図るためにも、今後とも、国立国会図書館や音楽大学図書館等を中心としたワークショップに積極的に取り組んでいくとい

うこと、近い将来オンラインによる研修をシステム化し、いつでもどこでも誰にでも開かれた研修の場を提供していけることを考えていくということであった。音楽資料への理解のため、この先も多くの方々の参加を期待したいと締めくくられた。

(くりばやし あかね 玉川大学教育博物館研究員)

【お知らせ】

特別企画展 五線譜に描いた夢 日本近代音楽の150年

会 期 2013年10月11日[金]—12月23日[月・祝]
会 場 東京オペラシティ アートギャラリー
開館時間 1:00 — 19:00 (金・土は11:00 — 20:00 /
いずれも最終入場は閉館30分前まで)
休館日 月曜日 (祝日の場合は翌火曜日)
入場料 一般 1,000円 (800円)、大学・高校生 800円
(600円)、中学・小学生 600円 (400円)
主 催 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団/
明治学院大学 / NHK プロモーション / 日本
経済新聞社

日本の音楽は、19世紀後半に西洋近代の文化と接触することによって、新たなスタートを切りました。黒船の軍楽の響きは鎖国時代の終わりを知らせ、アメリカ人宣教師たちが教える英語や讃美歌は、新しい時代の到来を告げました。明治維新政府は教育制度に西洋音楽を積極的に導入し、近代国家にふさわしい音楽の構築を試みます。以来150年、日本の近代音楽は、ときに国内外の政治情勢に翻弄されながらも、芸術文化の諸領域と連動し、今日の音楽文化の隆盛を築いてきました。

本展は、時代とともに歩んできた日本近代音楽の激動の150年を再現するものです。明治学院大学日本近代音楽館の所蔵資料を中心に、個人蔵の貴重な資料も加えて、開国以来の音楽を中心とした文化史を立体的かつダイナミックに構成します。

(展覧会案内より)

*会期中、ギャラリーでミニ・コンサートもあります。
<https://www.operacity.jp/ag/exh/> (オペラシティ)
<http://mg150.jp/event/> (明治学院大学)

2013 年度総会報告

日 時： 2013 年 6 月 2 日（日）

13 時 30 分～14 時 30 分

場 所： 東京芸術劇場ミーティングルーム

出席者： 荒川恒子、飯山かおり、稲葉良太、小倉洋子、加藤信哉、金澤正剛、栗林あかね、佐々木勉、佐藤みどり、嶋田弘美、関根和江、関根敏子、田島克実、寺本圭佑、藤堂雍子、長谷川由美子、平岩寧、山田晴通、林淑姫、東京音楽大学付属図書館、日本データベース開発株式会社

委任状提出：石田康博、植田栄子、加納マリ、岸本宏子、佐古純子、土田英三郎、寺本まり子、中西沙織、中山真衣、細田勉、樋口隆一、星野宏美、正木光江、山田高誌、柳原和音、米田かおり、劉薇、上野学園大学音楽・文化学部図書館、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪音楽大学音楽博物館、大阪芸術大学図書館、関西学院大学文学部美学研究室、国立音楽大学附属図書館、昭和音楽大学附属図書館、同志社女子大学図書・情報センター、桐朋学園大学音楽学部附属図書館、同朋学園大学音楽学部附属図書館、名古屋芸術大学附属図書館、フェリス女学院大学附属図書館、民音音楽ライブラリー、武蔵野音楽大学附属図書館

出席者 21 名 + 委任状 31 通で総会成立（会員総数：個人会員 57、団体会員 19 の過半数）

開会の辞：金澤正剛支部長

議長選出

稲葉良太氏（東京音楽大学付属図書館）

I 報告事項

1. 会員の異動

退会 加藤修子氏 住川頼子氏

入会 嶋田弘美氏

明治学院大学図書館付属日本近代音楽館

2. 2012 年活動報告（資料①）

3. 2012 年会計報告と会計監査報告（資料②）

4. IAML 国際本部における電子選挙への対応

(1) 本部会計より日本支部の会員全員のアドレス情報の提供要請。

(2) 2013 年 1 月 26 日役員会にて、住所を含めた個人情報の再調査を行うことを決定。2 月 25 日に文書発送、3 月 8 日までに回答。

(3) 2 月 28 日発行のニューズレター 46 号にて事務局便りとしてメールアドレス確認のためのお願いを掲載。

(4) 3 月 15 日に未回答の会員で、アドレスの登録者に BCC でアドレス確認のメールを発送。

(5) 3 月 28 日にアドレスを持っている方全員に、BCC で本部へアドレスを送ったことを報告。ただし、(4) (5) とともにメールが届いていないことが後に判明。

(6) 5 月の選挙期間にはいって本部のホームページ上に候補者の情報が掲載。電子選挙の手続きについて事務局で確認し、5 月 10 日に日本支部会員に本部事務局長シェクター氏の文書及びニューズレター掲載用に書いた文書をつけて発送。メールアドレスを持たない会員については候補者のプロフィール及び投票用紙をダウンロードして郵送。登録アドレスで文書が届かなかった会員について郵送で新アドレスを教えてくれるように伝えた。これらの文書は 5 月 14 日に郵送。

(7) 5 月 25 日発行のニューズレター 47 号「事務局だより」で、各会員に送った選挙の方法を詳しく解説した文書と電子選挙を望まない会員に

たいするお知らせを掲載。

(8)5月29日に再度選挙への投票を呼びかけ。

5. 2012 年度「日本の音楽資料」調査終了

2009 年、2011 年、2012 年と続いた日本の音楽資料の調査が終了した。

2009 年度は 1) 日本の図書館資料館所蔵の日本人の作曲家の自筆譜調査、2) 日本の図書館、資料館等所蔵の 1945 年までに出版された印刷譜調査、3) 日本の図書館資料館所蔵の外国の作曲家の自筆譜調査、4) 日本の図書館資料館所蔵の 1900 年までに出版された外国の印刷譜調査、の 4 つのカテゴリーに分けてアンケート方式で実施された。2011 年は上記の内、2) 日本の図書館・資料館所蔵の 1945 年までに出版された印刷譜調査の精査及び、国立国会図書館所蔵データのチェックを行った。2012 年は、未提出データの新規登録と既出データの原本調査及び、集積データの精査と共通書誌作成を行った。その結果、調査期間 170 館、収録資料総数 19,380 点、書誌タイトル数 9183 である。委員の感触として、9183 の書誌タイトル数は「多くない」。なおデータ編集にあたって、典拠レコードは(株)トッカータの協力を得た。調査データは国立国会図書館を通して公開される予定である。また、3 年におよぶ調査は本年 11 月に開催される「日本音楽学会全国大会」のラウンド・テーブルで報告される。詳細な報告は平成 25 年 3 月に『『日本の音楽資料』のデータベース化のための調査研究(第 2 次)』として刊行された。

6. 会員会議参加補助用基金への応募結果
応募なし

7. 例会 2 回の例会を開催 (資料①)

8. ニューズレター 3 回刊行 (資料①)

9. ホームページ 2 回更新 (資料①)

II 協議事項

1. 2013 年活動計画 (資料①) 決定

2. 2013 年予算案 (資料③) 決定

3. ウィーン会議への代表参加者 決定
金澤正剛支部長

4. 国際会議参加補助基金の運用 (候補者資格) について

現行の「初めて国際大会に参加する個人会員で図書館資料館等に勤務するもの、大学等の非常勤講師を含む研究者とする」を「初めて国際大会に参加する個人会員(団体会員の構成員附含む)で図書館資料館等に勤務するもの、大学等の非常勤講師を含む研究者とする」にする案が了承された。

基金は 2002 年に発足した。会費納入の際に上乗せして寄せられた資金をプールする積立方式を取り、一般会計とは別枠で運用している。したがって、会員会議参加補助基金のみが積みあがっていくため、2007 年の総会の際、基金募集停止が提案され、了承された。2004 年に候補者資格見直しが総会で取り上げられ、現行のものとなった。現在までに 4 名が基金によって、国際会議に参加した。

役員会案に対して、基金の意図を周知させるようにとの意見が出された。

5) 次期役員選挙について 選挙管理委員会を発足させる。委員長 1 名、委員 2 名の構成である。委員長には加藤信哉氏。委員として佐藤みどり氏が決まっている。残り一名は調整中である。

その他、例会のテーマとして新目録規則(RDA)に関する報告を望む声が出された。

(文責・長谷川由美子事務局長)

資料①

2012 年度活動報告および 2013 年度活動計画書

	2012 年報告	2013 年活動中間報告及び予定
国際会議	モントリオール会議 2012 年 7 月 22-27 日 出席者: 荒川恒子、金澤正剛、久保田慶一、藤堂雍子 代表出席者: 金澤正剛 発表者: 久保田慶一 題目: 「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究について ”The activity of the Research Committee of Musical Sources in Japan in the years 2009 and 2011”	ウィーン会議 2013 年 7 月 28 日-8 月 2 日 出席者: 荒川恒子、金澤正剛、寺本まり子、藤堂雍子 代表出席者: 金澤正剛
総会	2012 年 6 月 3 日(日) 場所: 東京文化会館小会議室 内容: 活動計画、年間予算その他	2013 年 6 月 2 日(日) 場所: 東京芸術劇場ミーティングルーム7 内容: 活動計画、年間予算その他
役員会	第 1 回: 4 月 6 日(金) (立教大学マキムホール) 第 2 回: 5 月 28 日(月) (東京文化文化会館応接室)	第 1 回: 1 月 26 日(土) (立教大学マキムホール) 第 2 回: 5 月 16 日(木) (立教大学マキムホール) 第 3 回
例会・集会	第 52 回例会 6 月 3 日(日) (東京文化会館小会議室) 音楽図書館と音楽資料 1. 日本の音楽資料 2011 年度報告 林淑姫(明治学院大学) 2. IAML の将来 Pia Shekhter(IAML 本部事務局長) 司会 加藤信哉 第 53 回例会 10 月 20 日(土) 1. メンデルスゾーンのヴァイオリン・ソナタ集 (ペーレンライター原典版、2009 年)の校訂に携わって 星野 宏美(立教大学) 2. ペーレンライター社の歴史 原典版の編集とはなにか? 「原典版」編集の現場から〜(ダグラス・ウッドフル・ハリス氏 ペーレンライター社)他(通訳付き) オーガナイザー・司会 林淑姫	第 54 回例会 6 月 2 日(日) (東京芸術劇場ミーティングルーム7) 1. 南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化——現状と公開に向けて 美山良夫 司会・コメンテーター 金澤正剛 2. IAML 日本支部 30 周年記念事業「現職音楽ライブラリアン研修経験に関する調査」報告と討議 伊藤真理(愛知淑徳大学) 加藤信哉(筑波大学) 松下鈞(次世代コンテンツ推進機構) 第 55 回例会 秋季開催 詳細未定
ニューズレター	第 43 号 2012 年 2 月 29 日 ダブリン大会特集号(金澤正剛、荒川恒子、伊藤真理、寺本圭佑) 第 44 号 2012 年 5 月 25 日 第 51 回例会・シンポジウム報告・傍聴記(柳原和音) 第 45 号 2012 年 12 月 25 日 第 52 回総会報告 例会報告・傍聴記 IAML 事務局長ピア・シェクター氏を迎えて(加藤信哉)	第 46 号 2013 年 2 月 28 日 IAML モントリオール国際大会報告(荒川恒子) IAML 国際大会で発表して(久保田慶一) 第 47 号 2013 年 5 月 25 日 30 周年記念事業「現職音楽ライブラリアン研修経験に関する調査」報告(伊藤真理、加藤信哉) IAML 日本支部第 53 回例会傍聴記(小倉洋子) 第 48 号 詳細未定
ホームページ更新	2012 年 5 月 31 日: ニュースレター第 43 号掲載、最新ニュース更新(総会および第 52 回研究例会) 2012 年 10 月 11 日: IAML 第 53 回例会のご案内	2013 年ニューズレター第 44 号掲載 2013 年 6 月 1 日ニューズレター第 45 号 46 号掲載
その他	本部への会費送金(2012 年 5 月 10 日)	本部への会費送金(2013 年 5 月 2 日)

資料②

2012 年度決算報告書

IAML2012年決算12月31日

費 目	2012年度		予算決算差額	備考
	予算	決算		
2011年度繰越:				
現金	9,803	9,803	0	
郵便局	1,313,678	1,313,678	0	
(内 会員会議参加補助基金)				¥423,000
銀行	378,115	378,115	0	
(小 計)	1,701,596	1,701,596	0	
収入:				
未収会費				
2011年以前				
個人	18,000	12,000		
団体	0	0	0	
会費2012年				
個人	0	138,000	-138,000	
団体	0	56,000	-56,000	
会費2013年				
個人	342,000	180,000	162,000	個人58(内名誉会員1)
団体	238,000	210,000	28,000	団体17
会費2014年				
個人	0	6,000	-6,000	
団体	0	0	0	
利息	50	61	-11	
(小 計)	598,050	602,061	-4,011	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
(収入小計)	598,050	602,061	-4,011	
収入総額	2,299,646	2,303,657	-4,011	
支出:				
本部宛会費送金	277,239	277,239	0	2633.60EURO/1EURO=105.27YEN
予備費	30,000	0	30,000	
経常経費:				
RILM分担金	60,000	60,000	0	
RILM Fontes編集委託費	40,000	40,000	0	RILMに委託しているFontesのため
大会代表派遣費2012	100,000	100,000	0	の編集に対して
関連団体会議参加費	10,000	0	10,000	
ニューズ・レター	36,000	35,427	573	
会議費、例会費	30,000	13,535	16,465	
交通費	100,000	29,030	70,970	
通信費	50,000	39,720	10,280	
消耗品費	30,000	3,612	26,388	
雑費	5,000	3,655	1,345	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	23,940	1,060	ドメイン利用料年額/レンタル・サーバ料金は4年に1度
(経常経費小計)	496,000	348,919	147,081	
会員会議参加補助基金	100,000	0	100,000	
特別事業費	20,000	15,200	4,800	
支出総額	923,239	641,358	281,881	
次年度繰越	1,376,407	1,662,299	285,892	

次年度繰越金	
現金	64,169
郵便局	1,375,939
(内 会員会議参加補助基金)	
銀行	222,191
総額	1,662,299

(¥423,000)

IAML日本支部の2012年会計明細書を
監査した結果、適正に処理、
記載されていると認めます。

2013年5月29日

IAML日本支部会計監査役

関根和江



資料③

2013年度予算書

費 目	2013年度予算	2012年度決算	差額	備考
前年度繰越:				
現金	64,169	9,803	54,366	
郵便局	1,375,939	1,313,678	62,261	
(内 会員会議参加補助基金)				¥423,000
銀行	222,191	378,115	-155,924	
(小 計)	1,662,299	1,701,596	-39,297	
収入:				
未収会費				
2012年以前				
個人	18,000	150,000	-132,000	
団体	0	56,000	-56,000	
会費2013年				
個人	0	180,000	-180,000	
団体	0	210,000	-210,000	
会費2014年				
個人	342,000	6,000	336,000	個人58(内名誉会員1)
団体	266,000	0	266,000	団体19
利息	50	61	-11	
(小 計)	626,050	602,061	23,989	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
(収入小計)	626,050	602,061	23,989	
収入総額	2,288,349	2,303,657	-15,308	
支出:				
本部宛会費送金	364,013	277,239	86,774	2797.60EURO/1EURO=131.01YEN
予備費	30,000	0	30,000	
経常経費:				
RILM分担金	60,000	60,000	0	
RILM Fontes編集委託費	40,000	40,000	0	
大会代表派遣費	100,000	100,000	0	
関連団体会議参加費	10,000	0	10,000	
ニューズ・レター	40,000	35,427	4,573	↑ ¥12,000×年3回 +α
会議費、例会費	50,000	13,535	36,465	↑ 第55回例会準備
交通費	70,000	29,030	40,970	↓
通信費	60,000	39,720	20,280	↑ 本部選挙に伴う事務連絡
消耗品費	40,000	3,612	36,388	↑ 封筒印刷
雑費	5,000	3,655	1,345	
アルバイト代	10,000	0	10,000	
HP運営費	25,000	23,940	1,060	
(経常経費小計)	510,000	348,919	161,081	
会員会議参加補助基金	100,000	0	100,000	
特別事業費		15,200	-15,200	
支出総額	1,004,013	641,358	362,655	
次年度繰越	1,284,336	1,662,299	-377,963	
(内本部宛会費送金+経常経費)	874,013	626,158	247,855	
(内 会員会議参加補助基金)	423,000	423,000	0	



事務局だより



会員参加補助基金の運用

6 月に開かれた総会において、国際会議会員参加補助基金への応募はなしとの報告を行ったが、総会後、昭和音楽大学附属図書館から申し込みがあった。役員会で検討のうえ承認。団体会員としては初の運用となった。昭和音大ではウィーン会議に大和紘子氏を派遣した。

選挙管理委員に栗林あかね氏

総会の際、選挙管理委員 3 名のうち、加藤信哉氏（委員長）、佐藤みどり氏（委員）の決定を報告したが、残り 1 名について、その後役員会より栗林あかね氏に委嘱、了解を得た。

ラウンドテーブル「日本の音楽資料」

日本音楽学会全国大会（11 月 2,3 日 慶應義塾大学）において、ラウンドテーブル『日本の音楽資料』調査委員会による調査報告をめぐって』が行われる。11 月 3 日 15:40 から 17:40 まで。出席者は久保田慶一、林淑姫、長谷川由美子、上野大輔の各氏。

韓国で音楽関係資料の国際会議

11 月 7 日から 9 日まで音楽資料に関する国際会議 "Keeping music alive" が、韓国・梨花女子大学で開催される。出席者は IAML 会長のバーバラ・マッケンジー、IAML 事務局長ピア・シェクター、RISM のクラウス・カイル、ジェニファー・ウォード、シュテファン・カイザーのほか、日本から細川周平、安田寛、ヘルマン・ゴチェフスキー、長谷川由美子が出席、中国、台湾、韓国からも複数の発表者が予定されている。

図書館関係者のための RDA 実践講習会

現在多くの図書館は、洋書と音楽資料については英米目録規則（AACRII）に従って目録を作成しているが、アメリカ議会図書館では AACRII から RDA への移行が始まり、国内の音楽図書館で

も RDA についての情報収集や勉強会が行われている。東京音楽大学付属図書館では株式会社トッカータの協力を得て、10 月 5 日（土）の午後、実践講習会を実施する。詳細は東京音楽大学のホームページを参照のこと。

<http://www.tokyo-ondai-lib.jp/index.html>

次世代コンテンツ推進機構（JCPO）のワークショップ終了

7 月 31 日、次世代コンテンツ推進機構（JCPO）主催により、第 1 回「音楽資料情報担当者ワークショップ」が開かれた（東京音楽大学附属図書館）。音楽に関する基本的な参考図書の紹介および、ワークショップ形式による事例研究を実施。参加者は 30 名を超え、好評であった。第 2 回は「わが国で刊行された楽譜の目録作成の諸問題を解決する方法」と「音楽関係 Q & A ケーススタディ②」をプログラムとして来年の春開催予定。同ワークショップは、東京音楽大学附属図書館共催、国立国会図書館後援のもとで開催されている。

国立国会図書館「音楽資料・情報担当者セミナー（平成 25 年度）」終了

9 月 6 日、国立国会図書館「音楽資料・情報担当者セミナー」が本年度も開催された。今回のテーマは「音声・映像記録メディアの現状と課題、今後の展望」であった。

新会員

大和紘子氏（昭和音楽大学附属図書館）

☆次号はウィーン会議特集です。

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 48 号

2013 年 9 月 30 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
東京音楽大学附属図書館内
<http://www.iaml.jp>